

大森伝建・五百羅漢

羅漢（梵語：アルハット）は、涅槃に達し、禪宗で尊崇される仏弟子をいいます。石見銀山の鉾山で亡くなった人々を祀る羅漢寺は、羅漢に祈れば亡くなった鉾夫の魂を救い、その家族に平安がもたらされるという信仰に基づいて建てられました。羅漢寺の創建は、1741年に、将軍徳川吉宗（1684年～1751年）の次男で、当時石見銀山で奉行を務めた田安宗武（1716年～1771年）の庇護を受けて開始されました。羅漢寺の完成には25年の歳月と莫大な費用を要しましたが、その結果、素晴らしい寺が出来上がりました。山の中腹に3つの洞窟が掘られ、数百体の羅漢の石像が安置されました。石像は、それぞれ姿勢と表情が異なるため、参拝者は亡くなった家族に似た石像を見つけることができました。これらの石像の背面には、地元の信徒から田安氏一族や江戸（現在の東京）の女官に至るまで、寄進者の名前が記されていました。現在、参拝者は寺院創建時からあるアーチ形の石橋を渡り、それぞれ250体と251体の像が安置されている洞窟に入ることができます。羅漢寺は「五百羅漢」とも呼ばれていますが、これは正確な数字を意味するものではありません。実際の像の数はかつてはかなり多かったものの、何世紀もの間に多くの被害を受け、現在残っている羅漢は500体です。